

平成 28 年度 研究成果報告書
 Research Achievement Report FY2016

講座名・職名 Course Title・Job Title	ヨーロッパ・アメリカ I 講座・教授
氏名 Name	大津智彦
専門分野 Academic Field	英語学

<ul style="list-style-type: none"> ● 主たる研究テーマ ● Principal Research Subject 	<ul style="list-style-type: none"> ● 英語統語法の歴史的発達
<ul style="list-style-type: none"> ● イギリス英語における離接詞 <i>likely</i> に関して、<i>very</i> や <i>most</i> 等の強意副詞を伴って使用されるか否かという観点を中心に、1600 年代から 1900 年代後半までの変遷を、主にフィクションをテキストジャンルとするコーパスを利用して調査した。その結果、①1600 年代では強意副詞を伴う比率が非常に少なく単独使用が大多数を占め、②1700 年代から 180 度の転換を起こしたがごとく強意副詞を伴う例が圧倒的多数を占めるようになり、この状態が 1900 年代前半まで続くが、③1900 年代後半からは単独使用が復活の兆しを見せ、それまでの 2 倍程度の比率で現れるようになった、ということが明らかになった。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 今回のように、英語においてある用法が生まれ、一旦衰退したあと復活するというケースは筆者の管見では他に例を知らない。そのメカニズムを探ることは言語変化の複雑さや多様性をまたひとつ明らかにするという意味で興味深いことだと考えている。 ➤ 上記の研究結果は、大津智彦 (2017) 「イギリス英語における離接詞 <i>likely</i> の用法：1600 年代から 1900 年代後半までの変遷」『英米研究』第 41 号 27-45 として発表した。 	